

Alibaba Cloud

#象存#

コンソールユーザガイド

Document Version20200509

目次

1	バケットの管理.....	1
1.1	バケットの作成.....	1
1.2	WORM 戦略の設定.....	4
1.3	ドメインの管理.....	5
1.3.1	カスタムドメイン名のバインド.....	5
1.3.2	CDN アクセラレーションドメイン名のバインド.....	11
1.3.3	証明書のホスティング.....	21
1.4	静的 Web サイトのホスティング.....	26
1.5	アンチリーチの設定.....	27
1.6	CORS ルールの設定.....	27
1.7	ライフサイクルの設定.....	29
1.8	リージョン間レプリケーションの設定.....	31
1.9	Back-to-origin ルールの設定.....	33
1.10	バケットの削除.....	35
1.11	アクセス制御.....	36
1.11.1	バケット ACL の変更.....	36
1.12	基本的な設定.....	37
2	オブジェクトの管理.....	38
2.1	概要.....	38
2.2	フォルダーの作成.....	38
2.3	オブジェクトの検索.....	39
2.4	ACL オブジェクトの変更.....	40
2.5	バケットポリシーを使用した他のユーザーに対する OSS リソースへのアクセス許可.....	41
2.6	オブジェクトのダウンロード.....	44
2.7	シンボリックリンクの設定.....	46
2.8	オブジェクトの削除.....	48
2.9	フォルダーの削除.....	49
3	ログの管理.....	50
3.1	ログの設定.....	50
3.2	ログ分析.....	51
4	リソースの使用量の確認.....	55

1 バケットの管理

1.1 バケットの作成

ファイルを OSS にアップロードする前に、バケットを作成し、リージョン、ACL、その他のメタデータなど、バケットの属性を指定する必要があります。

手順

1. [OSS コンソール](#)にログインします。

- 2. 左側のバケットリストで **[+]** をクリック、または右上隅にある **[バケットの作成]** をクリックします。次の図のように、**[バケットの作成]** ダイアログボックスが表示されます。

Create Bucket ? Create a bucket X

Note: Storage Class and Region cannot be changed after the bucket is created.

Bucket Name 0/63

Region ▼

Products in the same region can communicate with each other over an internal network. The region cannot be changed after purchase. Exercise caution.

Endpoint oss-cn-beijing.aliyuncs.com

Storage Class Standard IA Archive

Standard: high reliability, high availability, high performance, frequent access

[How to Choose a Suitable Storage Class](#)

Access Control List (ACL) Private Public Read Public Read/Write

Private: Authentication is required for users to read or write files.

3. [バケット名] にバケットの名前を入力します。

- バケット名は命名規則に準拠している必要があります、既存のすべての OSS バケット間で一意である必要があります。
-
- バケットの作成後にバケットの名前を変更することはできません。
- バケットの命名規則の詳細については、「[#unique_3](#)」をご参照ください。

4. [リージョン] のドロップダウンリストから、バケットを作成する必要があるリージョンをクリックします。

バケットの作成後にバケットの領域を変更することはできません。この操作を行う際にはご注意ください。ECS インスタンスからイントラネットを介してバケットにアクセスするには、バケットの作成時に ECS インスタンスが属する領域を選択します。詳細は、「[#unique_4](#)」をご参照ください。

5. ニーズに応じて、[ストレージクラス] に次のストレージクラスのいずれかを選択します。

- **Standard:** 信頼性と可用性が高く、頻繁なデータアクセスをサポートする、高性能のオブジェクトストレージサービスを提供します。
- **IA:** 長期保存され、アクセス頻度が低いデータに適用されます。"IA" の単価は "Standard" クラスよりも低いです。"IA" ストレージクラスのオブジェクトは、最低 30 日間保存する必要があります。"IA" ストレージクラスのオブジェクトを 30 日間保存する前に削除すると、料金が発生します。"IA" ストレージクラスのオブジェクトはまた、最小請求サイズ 64 KB があります。64 KB より小さいオブジェクトは 64 KB として課金されます。データ取得にも料金が発生します。
- **Archive:** 長い期間、アーカイブデータを保存するのに適しています。(半年以上保存され、保管期間中は頻繁にはアクセスされないデータ)。"Archive" クラスのデータを "IA" クラスのデータに変換する必要がある場合は、データにアクセスできるようになるまでに約 1 分かかります。アーカイブストレージクラスに適したオブジェクトの例には、アーカイブデータ、医用画像、科学データ、ビデオなどがあります。

6. [アクセス制御リスト (ACL)] でバケットの ACL を選択します。

- **Private:** バケット内のオブジェクトに対して読み書きできるのはバケット所有者だけです。他のすべてのユーザー (匿名ユーザーを含む) は、承認なしにバケット内のオブジェクトに対して操作を実行することはできません。
- **Public Read:** バケットの所有者だけがバケット内のオブジェクトに書き込むことができます。他のすべてのユーザー (匿名ユーザーを含む) は、バケット内のオブジェクトからしか読み取ることができません。
- **Public Read/Write:** すべてのユーザー (匿名ユーザーを含む) がバケット内のオブジェクトに対して読み書きできます。



警告 :

この ACL が設定されている場合、読み取りおよび書き込み操作によって発生する料金はバケット所有者の責任です。この操作を行う際にはご注意ください。

7. [OK] をクリックします。

1.2 WORM 戦略の設定

バケット内のファイルの保護期間を指定するには、WORM (Write Once Read Many) 方式を使用します。保護期間中にファイルを変更または削除することはできません。現在、WORM 戦略は、中国 (深セン) のバケットにのみ設定できます。

1. [OSS コンソール](#) にログインします。
2. 左側のバケットリストで、対象のバケットの名前をクリックします。
3. [基本設定] タブをクリックして、**WORM Settings** を見つけ、[設定] をクリックします。
4. [戦略の作成] をクリックして、[戦略の作成] ダイアログボックスを開きます。
5. WORM 戦略の [ライフサイクル] を設定します。

[ライフサイクル] の値の範囲は 1 日から 70 年です。

6. [OK] をクリックします。

WORM 戦略が作成されると、"IN_PROGRESS" 状態になります。

7. [ロック] をクリックします。

WORM 戦略はロックされた後は削除できませんが、[編集] をクリックして戦略のライフサイクルを延ばすことができます。

1.3 ドメインの管理

1.3.1 カスタムドメイン名のバインド

オブジェクトが OSS バケットにアップロードされると、そのオブジェクトの URL が自動的に生成されます。この URL を使用して、バケット内のオブジェクトにアクセスします。カスタムドメイン名を使用してアップロードされたオブジェクトにアクセスするには、オブジェクトが格納されているバケットにカスタムドメイン名をバインドし、そのバケットのインターネットドメイン名を指定する CNAME レコードを追加する必要があります。このトピックでは、カスタムドメイン名をバケットにバインドする方法、および CNAME レコードを追加する方法について説明します。

ドメイン名をバケットにバインド

1. [OSS コンソール](#)にログインします。左側のバケットリストで、カスタムドメイン名をバインドするバケットの名前をクリックします。

2. [ドメイン名] > [セルフホストドメイン名をバインドする] をクリックします。セルフホストドメイン名のバインドページで、次のパラメーターを設定します。

Bind Self-Hosted Domain Name ✕

Self-Hosted Domain Name 0/63

Enable Alibaba Cloud CDN

Add CNAME Record Automatically

The CNAME record cannot be added automatically, and you need to add it manually. It is probably because this domain name has been resolved in the cloud under another Alibaba Cloud account.

The domain name is successfully bound to your bucket only after you click Submit and then add the CNAME record at your DNS service provider. See the [help](#).

- セルフホストドメイン名: hello-world.com など、バインドするドメイン名を入力します。ドメイン名の最大長は 63 文字です。
- Alibaba Cloud CDN を有効化: 「[CDN ベースの OSS 高速化](#)」を有効にする場合は、「[Attach a CDN acceleration domain name](#)」をご参照ください。
- CNAME レコードを自動的に追加: Alibaba Cloud アカウントによって管理されている CNAME のレコードを自動的に追加できます。Alibaba Cloud アカウントで管理されていな

いドメイン名のレコードを追加するには、DNS プロバイダーの DNS を手動で設定する必要があります。詳しくは、「[Manually add a CNAME record](#)」をご参照ください。

3. セルフホストドメイン名を入力して、[CNAME レコードを自動的に追加する] を有効にします。[送信] をクリックします。



注:

- ドメイン名の競合メッセージが表示された場合、そのドメイン名は別のユーザーが所有するバケットにバインドされています。[TXT の取得] をクリックして、ドメイン名のテキストレコードを DNS プロバイダの DNS に追加し、ドメイン名の所有権を確認してドメイン名をバケットに強制的にバインドすることができます。ただし、ドメイン名を新しいバケットに強制的にバインドすると、そのドメイン名は現在バインドされているバケットから切り離されます。詳しくは、「[Verify domain name ownership](#)」をご参照ください。
- ドメイン名が提出されていないことを示すメッセージが表示されたら、最初にドメイン名を[提出する](#)必要があります。

4. バケットからドメイン名を切り離す場合は、[ドメイン名] > [バインド設定] > [バインド解除]の順にクリックします。

CNAME レコードを手動で追加

次の手順は、CNAME レコードが自動的に追加されないシナリオにのみ適用されます。

DNS プロバイダの DNS に CNAME レコードを追加する必要があります。このトピックでは、Alibaba Cloud DNS を例として、CNAME レコードを追加するプロセスを説明します。

1. [Alibaba Cloud DNS コンソール](#)にログインします。
2. ドメイン名の一覧で、レコードを追加するドメイン名の右側にある、[設定] をクリックします。
3. [レコードの追加] をクリックして DNS 情報を入力します。次の表に、設定可能なパラメータを示します。

パラメーター	説明
Type	ドメイン名の宛先となるレコードのタイプを選択します。 この例では、 [CNAME] をクリックします。

パラメーター	説明
Host	ドメイン名のプレフィックスに従ってホストレコードを入力します。例： <ul style="list-style-type: none"> ドメイン名が www.aliyun.com の場合は、"www" と入力します。 ドメイン名が aliyun.com の場合は、文字 "@" を入力します。 ドメイン名が abc.aliyun.com の場合は、"abc" と入力します。 ドメイン名が a.aliyun.com や b.aliyun.com などの第2レベルのドメイン名の場合は、アスタリスク "*" を入力します。
ISP Line	ドメイン名を解決するために使用される ISP 回線を選択します。 システムが最適な回線を選択できるようにするには、 既定値 を選択することを推奨します。
Value	選択したレコードのタイプに基づき、レコードの値を入力します。 この例では、バケットのインターネット URL を入力します。
TTL	レコードの更新期間を選択します。この例では、既定値を選択します。

4. [OK] をクリックします。

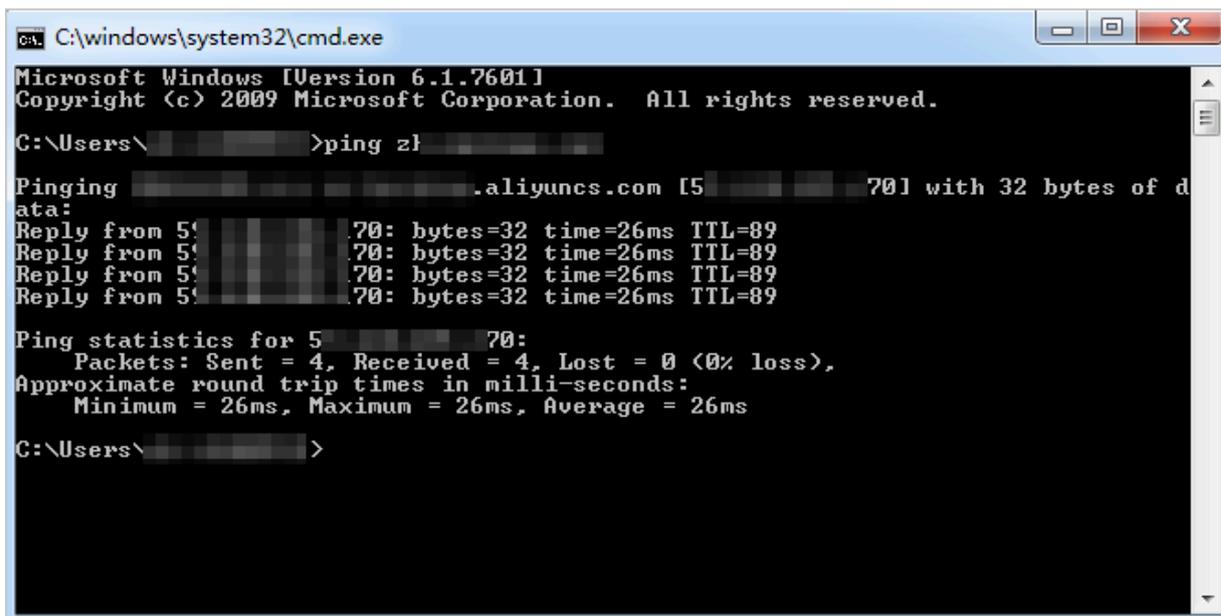


注：

新しく追加された CNAME レコードは、直ちに有効になります。CNAME レコードに対する変更が有効になるまで、最大 72 時間かかります。

CNAME のステータスの確認

CNAME レコードを設定した後、そのレコードが有効になるまでに必要な期間は DNS プロバイダーによって異なります。ping または lookup コマンドを実行して、追加された CNAME のステータスを確認します。コマンドが *.oss-cn-*.aliyuncs.com に送信された場合は、CNAME は有効になっています。



```
C:\windows\system32\cmd.exe
Microsoft Windows [Version 6.1.7601]
Copyright (c) 2009 Microsoft Corporation. All rights reserved.

C:\Users\>ping zl

Pinging .aliyuncs.com [5 70] with 32 bytes of data:
Reply from 5: 70: bytes=32 time=26ms TTL=89

Ping statistics for 5 70:
    Packets: Sent = 4, Received = 4, Lost = 0 (0% loss),
    Approximate round trip times in milli-seconds:
        Minimum = 26ms, Maximum = 26ms, Average = 26ms

C:\Users\>
```

ドメイン名の所有権の検証

自分のユーザードメイン名が別のユーザーが所有するバケットに関連付けられている場合は、次のステップに従ってドメイン名の所有権を検証し、現在のバケットからドメイン名を強制的にデタッチします。



注：

次のステップは、「[カスタムドメイン名をバインドする](#)」ときに、ドメイン名の競合メッセージが表示されるシナリオでのみ適用されます。

1. ユーザーの情報に基づいてシステムによって生成されたテキストレコードを取得するには、[TXT の取得] をクリックします。

Bind Self-Hosted Domain Name ✕

Self-Hosted Domain Name 9/63

You need to add a specific TXT record to your domain name as follows, and OSS will verify the domain name ownership based on this TXT record:

- 1 **Log on to the website of your DNS service provider.**
Log on to the website of your DNS service provider, and then go to the domain management page for domain name resolution.
- 2 **Add the TXT record.**
Add the TXT record provided below. The TXT record is a token randomly generated by OSS and will be used to verify your domain name ownership.

Self-Hosted Domain Name:
Host Record: @
Value: oss-42ce6

Enable Alibaba Cloud CDN

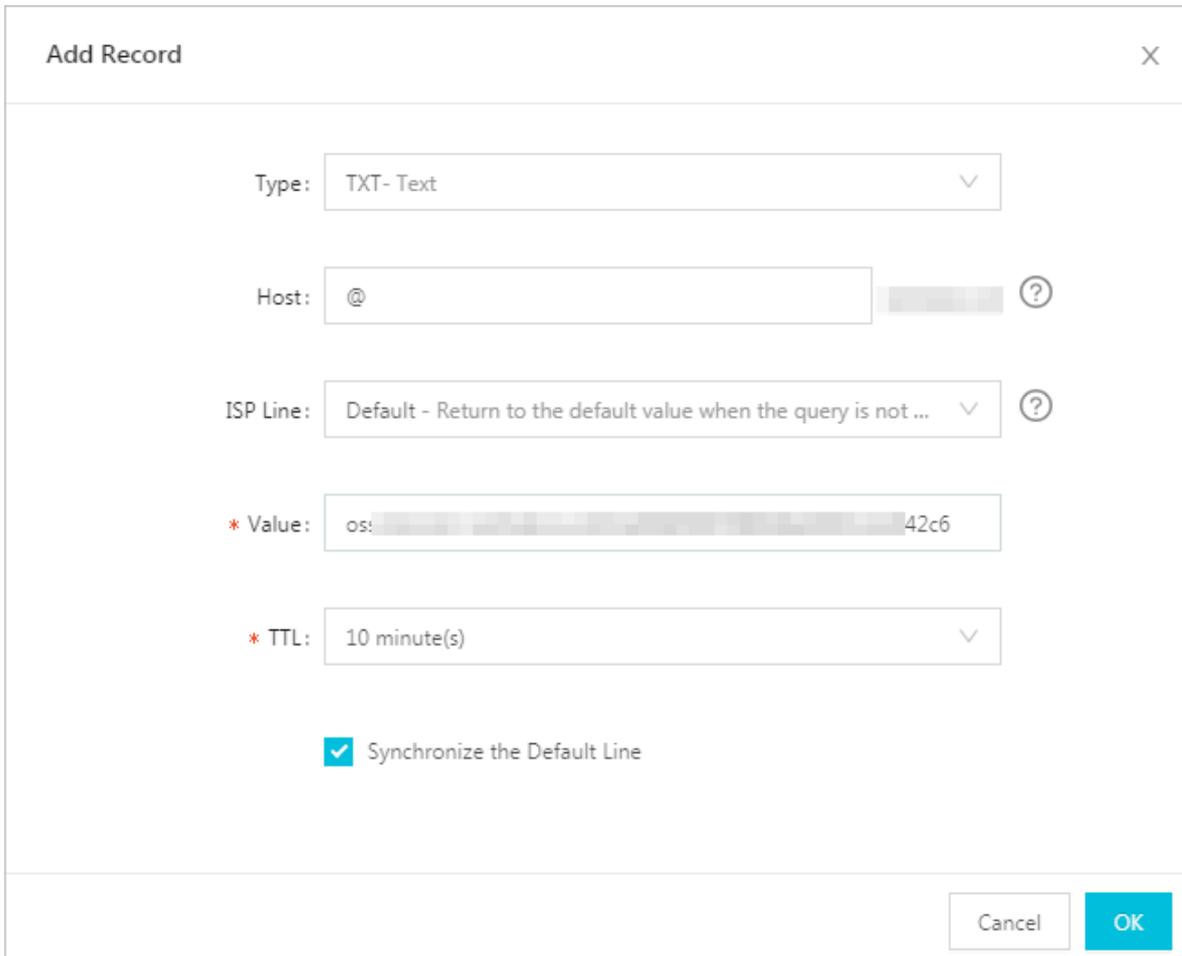
Add CNAME Record Automatically

The CNAME record cannot be added automatically, and you need to add it manually. It is probably because this domain name has been resolved in the cloud under another Alibaba Cloud account.

The domain name is successfully bound to your bucket only after you click Submit and then add the CNAME record at your DNS service provider. See the [help](#).

2. DNS プロバイダの DNS に TXT レコードを追加します。Alibaba Cloud DNS に追加されたドメイン名については、「[Manually add a CNAME record](#)」で説明されている手順に従い、レ

コードの追加 ページでレコードを追加します。その後、次のようにパラメーターを設定します。



- タイプ: TXT を選択
- ホスト: "@" を入力
- 値: OSS コンソールの【セルフホストドメインのバインド】ページで生成された値を入力します。
- 他のパラメーターの既定値を保持します。

3. 【セルフホストドメインのバインド】ページで、【TXT レコードを追加しました。申請を続行します】をクリックします。情報が正しいことをシステムが確認した場合、検証は成功します。

1.3.2 CDN アクセラレーションドメイン名のバインド

Alibaba Cloud CDN ベースのアクセラレーションサービスを使用して、OSS バケット内のオブジェクトを読み取ることができます。アクセラレーションサービスは OSS バケットをオリジンサイトとして使用し、コンテンツをオリジンサイトからエッジノードに配信します。その正確なスケジューリングシステムにより、Alibaba Cloud CDN は最適なエッジノードにリクエストを割り

当てるので、エンドユーザーは必要なコンテンツをすばやく読むことができ、インターネットトラフィックの混雑が緩和され、応答時間が短縮されます。

Alibaba Cloud CDN ベースのアクセラレーションサービスを有効にするには、セルフホストドメイン名を Alibaba Cloud CDN によって割り当てられた CDN アクセラレーションドメイン名に指定する必要があります。その後、セルフホストドメイン名に対するすべての要求は CDN エッジノードにリダイレクトされます。

次の2つの方法で Alibaba Cloud CDN ベースのアクセラレーションサービスを有効にします。

- セルフホストドメイン名を OSS バケットのドメイン名にバインドして、CDN ベースのアクセラレーションサービスを有効にします。詳しくは、「[方法 1: OSS コンソールから CDN ベースのアクセラレーションサービスを有効化する \(Method 1: Enable the CDN-based acceleration service through the OSS console\)](#)」をご参照ください。
- OSS バケットのドメイン名を CDN アクセラレーションドメイン名に指定してから、セルフホストドメイン名を CDN アクセラレーションドメイン名 (CNAME) にバインドします。詳しくは、「[方法 2: CDN コンソールから CDN ベースのアクセラレーションサービスを有効化する \(Method 2: Enable the CDN-based acceleration service through the CDN console\)](#)」をご参照ください。

方法 1: OSS コンソールから CDN ベースのアクセラレーションサービスを有効化する

1. [OSS コンソール](#)にログインします。左側のバケットリストで、カスタムドメイン名をバインドするバケットの名前をクリックします。

2. [ドメイン名] > [セルフホストドメイン名をバインドする]をクリックします。セルフホストドメイン名のバインド]ページで、次のパラメーターを設定します。

Bind Self-Hosted Domain Name ✕

Self-Hosted Domain Name 0/63

Enable Alibaba Cloud CDN

Add CNAME Record Automatically

The CNAME record cannot be added automatically, and you need to add it manually. It is probably because this domain name has been resolved in the cloud under another Alibaba Cloud account.

The domain name is successfully bound to your bucket only after you click Submit and then add the CNAME record at your DNS service provider. See the [help](#).

- セルフホストドメイン名: hello-world.com など、バインドするドメイン名を入力します。ドメイン名の最大長は 63 文字です。
- Alibaba Cloud CDN の有効化: [CDN ベースのアクセラレーションサービス](#)を有効にします。
- CNAME レコードを自動的に追加: Alibaba Cloud アカウントによって管理されている CNAME のレコードを自動的に追加します。Alibaba Cloud アカウントで管理されていない

ドメイン名のレコードを追加するには、DNSプロバイダーのDNSを手動で設定する必要があります。詳しくは、「[Manually add a CNAME record](#)」をご参照ください。

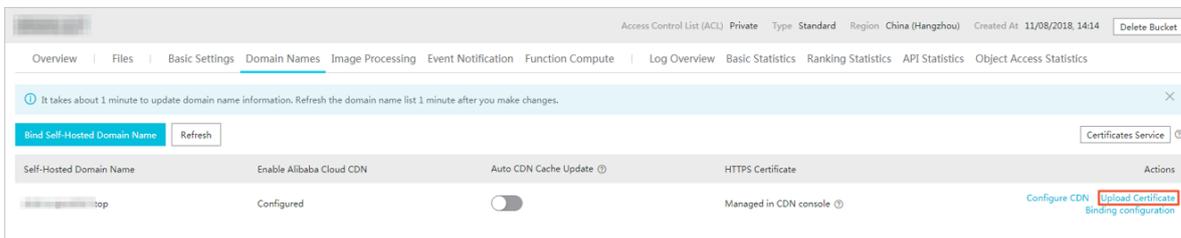
3. セルフホストドメイン名を入力して、**[Alibaba Cloud CDN を有効にする]**と**[CNAMEレコードを自動的に追加する]**を有効にします。
4. **[送信]**をクリックします。



注：

ドメイン名の競合メッセージが表示された場合、そのドメイン名は現在別のユーザーが所有するバケットにバインドされています。この問題を解決するには、**[TXTの取得]**をクリックしてDNSプロバイダーのDNSにドメイン名のテキストレコードを追加し、ドメイン名の所有権を確認してドメイン名をバケットに強制的にバインドします。ただし、ドメイン名を新しいバケットに強制的にバインドすると、そのドメイン名は現在バインドされているバケットからデタッチされます。詳しくは、「[Verify domain name ownership](#)」をご参照ください。

5. ドメイン名情報の更新が反映されるまでに約1分かかります。ドメイン名を更新したら、**[バインド設定]**をクリックして、**[CDN ドメイン名]**と**[OSS アクセスドメイン名]**を表示します。



方法 2: CDN コンソールから CDN ベースのアクセラレーションサービスを有効化する

1. [Alibaba Cloud DNS コンソール](#)にログインします。
2. **[ドメイン名]**>**[追加ドメイン名]**をクリックします。

3. CDN アクセラレーションドメイン名を入力し、アクセラレーションさせる OSS バケットをオリジンサイトとして選択します。

< Add Domain Name

1 Enter basic information
 2 Information audit
 3 Complete

*** Domain**

Wildcard domain names are supported, such as *.test.com [Learn more](#)

Resource Groups

*** Business Type** Image and Small File Download Video

Live Streaming Media

*** Origin Site** **Type**

Information OSS domain name IP Origin Site

Domain Name

Using OSS for the origin site will reduce your back-to-source traffic fees.

*** Port**

Port 80 Port 443

*** Acceleration Region**

Mainland China All regions include Mainland China

All regions exclude Mainland China

Different charges apply for different regions. Option of All regions exclude Mainland China does not need ICP. [Learn more](#)

Next
Cancel

パラメーター	説明
Domain	"ch.aliyun.com" などのドメイン名を入力します。
Resource Group	既定値のリソースグループを選択します。
Business Type	OSS に保存したコンテンツと一般的な使用方法に基づいて、シナリオに最適なビジネスタイプを選択します。
Origin Site Information	アクセラレーションさせたい OSS ドメイン名を選択します。

パラメーター	説明
Port	アクセスポートタイプを選択します。
Acceleration Region	アクセラレーションサービスを使用したいリージョンを選択します。

4. [次へ] をクリックします。

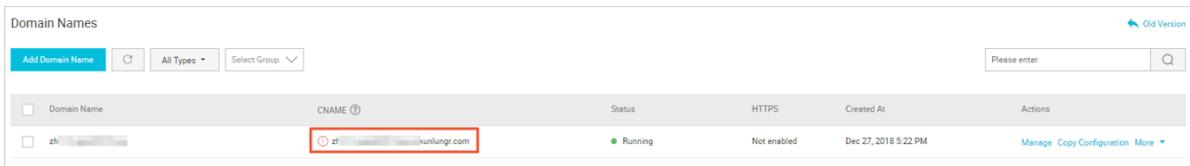
CDN アクセラレーション ドメイン名を追加すると、CNAME レコードが生成されます。CDN ベースのアクセラレーションサービスを有効にするには、CNAME レコードを DNS プロバイダーの DNS に追加する必要があります。詳しくは、「[Manually add a CNAME record](#)」をご参照ください。

CNAME レコードを手動で追加

次のステップは、CNAME レコードが自動的に追加されないシナリオにのみ適用されます。

DNS プロバイダーの DNS に CNAME レコードを追加する必要があります。このトピックでは、Alibaba Cloud DNS を例として使用して、CNAME レコードを追加するプロセスを説明します。

1. Alibaba Cloud CDN コンソールにログインし、[ドメイン名](#) ページを開きます。



2. 追加したいドメイン名の CNAME をコピーします。

3. [Alibaba Cloud DNS コンソール](#) にログインします。

4. ドメイン名の一覧で、レコードを追加するドメイン名の右側にある **[設定]** をクリックします。

5. **[レコードの追加]** をクリックして DNS 情報を入力します。次の表に、構成可能なパラメーターを示します。

パラメーター	説明
Type	ドメイン名の宛先となるレコードタイプを選択します。 この例では、 [CNAME] を選択します。

パラメーター	説明
Host	ドメイン名のプレフィックスに従ってホストレコードを入力します。例： <ul style="list-style-type: none"> ドメイン名が www.aliyun.com の場合は、"www" と入力します。 ドメイン名が aliyun.com の場合は、文字 "@" を入力します。 ドメイン名が abc.aliyun.com の場合は、"abc" と入力します。 ドメイン名が a.aliyun.com や b.aliyun.com などの第2レベルのドメイン名の場合は、アスタリスク "*" を入力します。
ISP 回線	ドメイン名を解決するために使用される ISP 回線を選択します。 システムが最適な回線を選択できるようにするには、 既定値 を選択することを推奨します。
Value	選択したレコードのタイプに基づき、レコードの値を入力します。 この例では、 手順 2 でコピーした CNAME レコードを入力します。
TTL	レコードの更新期間を選択します。この例では、既定値を選択します。

6. **[OK]** をクリックします。

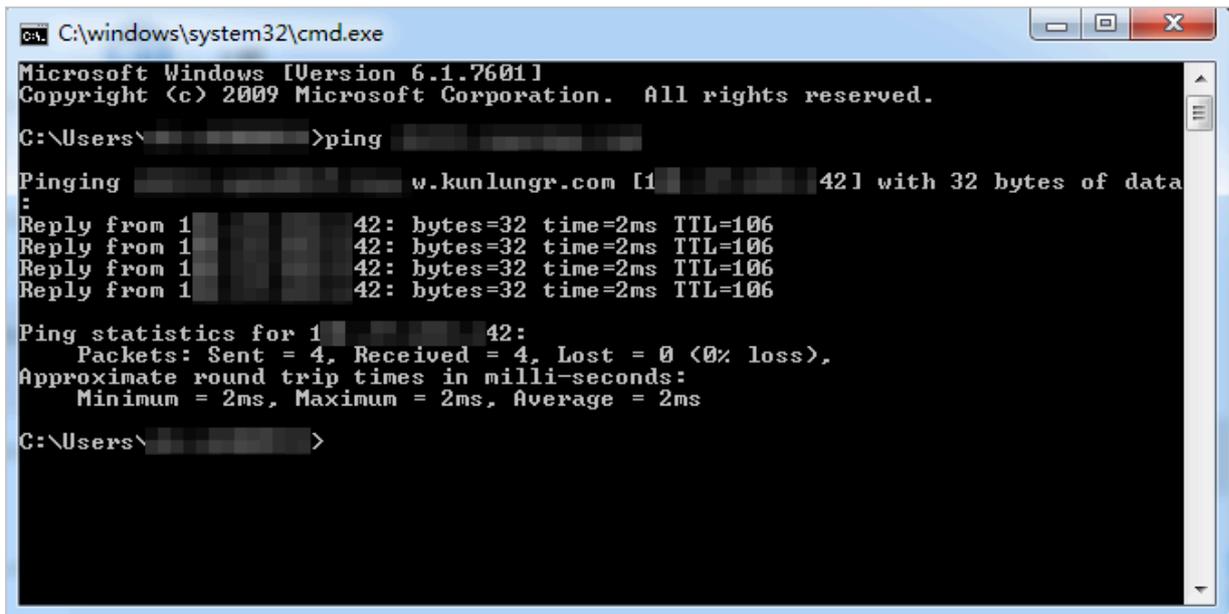


注：

新しく追加された CNAME レコードは、直ちに有効になります。CNAME レコードに対する変更が有効になるまで、最大 72 時間かかります。

CNAME のステータスの確認

CNAME レコードを設定した後、そのレコードが有効になるまでに必要な期間は DNS プロバイダーによって異なります。ping または lookup コマンドを実行して、追加された CNAME のステータスを確認します。コマンドが *.kunlun*.com に送信された場合は、CNAME は有効になっています。



```
C:\windows\system32\cmd.exe
Microsoft Windows [Version 6.1.7601]
Copyright (c) 2009 Microsoft Corporation. All rights reserved.

C:\Users\>ping

Pinging w.kunlungr.com [142] with 32 bytes of data:
:
Reply from 142: bytes=32 time=2ms TTL=106

Ping statistics for 142:
    Packets: Sent = 4, Received = 4, Lost = 0 (0% loss),
    Approximate round trip times in milli-seconds:
        Minimum = 2ms, Maximum = 2ms, Average = 2ms

C:\Users\>
```

ドメイン名の所有権の認証

自分のユーザードメイン名が別のユーザーが所有するバケットに関連付けられている場合は、次のステップに従ってドメイン名の所有権を認証し、現在のバケットからドメイン名を強制的にデタッチします。



注：

次のステップは、「[カスタムドメイン名をバインドする](#)」ときに、ドメイン名の競合メッセージが表示されるシナリオでのみ適用されます。

1. ユーザーの情報に基づいてシステムによって生成されたテキストレコードを取得するには、[TXTの取得] をクリックします。

Bind Self-Hosted Domain Name ✕

Self-Hosted Domain Name

You need to add a specific TXT record to your domain name as follows, and OSS will verify the domain name ownership based on this TXT record:

- 1 **Log on to the website of your DNS service provider.**
Log on to the website of your DNS service provider, and then go to the domain management page for domain name resolution.
- 2 **Add the TXT record.**
Add the TXT record provided below. The TXT record is a token randomly generated by OSS and will be used to verify your domain name ownership.

Self-Hosted Domain Name:

Host Record: @

Value: oss-

Enable Alibaba Cloud CDN

Add CNAME Record Automatically

The CNAME record cannot be added automatically, and you need to add it manually. It is probably because this domain name has been resolved in the cloud under another Alibaba Cloud account.

The domain name is successfully bound to your bucket only after you click Submit and then add the CNAME record at your DNS service provider. See the [help](#).

2. DNS プロバイダの DNS に TXT レコードを追加します。Alibaba Cloud DNS に追加されたドメイン名については、「[Manually add a CNAME record](#)」で説明されている手順に従いレ

コードの追加ページでレコードを追加します。その後、次のようにパラメーターを設定します。

The screenshot shows a dialog box titled "Add Record" with a close button (X) in the top right corner. The dialog contains the following fields and options:

- Type:** A dropdown menu with "TXT- Text" selected.
- Host:** A text input field containing "@".
- ISP Line:** A dropdown menu with "Default - Return to the default value when the query is not ..." selected.
- * Value:** A text input field containing "os: [redacted] 42c6".
- * TTL:** A dropdown menu with "10 minute(s)" selected.
- Synchronize the Default Line:** A checked checkbox.

At the bottom right of the dialog, there are "Cancel" and "OK" buttons.

- タイプ: TXT を選択
- ホスト: "@" を入力
- 値: OSS コンソールのセルフホストドメインのバインド ページで生成された値を入力します。
- 他のパラメーターの既定値を保持します。

3. セルフホストドメインのバインドページで、**[TXT** レコードを追加しました。申請を続行します。] をクリックします。情報が正しいことをシステムが確認した場合、認証は成功します。

自動 CDN キャッシュ更新の有効化



自動 CDN キャッシュ更新機能をサポートしているのは、中国本土と香港のリージョンのバケットだけです。

1. [OSS コンソール](#)にログインします。

2. 左側のバケットリストで、自動 CDN キャッシュ更新機能を有効にするバケットの名前をクリックします。
3. [ドメイン名]タブをクリックします。
4. ホストドメイン名がバインドされているレコードに対して [自動 CDN キャッシュ更新] を有効にします。

自動 CDN キャッシュ更新機能が有効になった後、バケット内のオブジェクトに対する変更を行うと、自動的に CDN キャッシュが更新されます。



注：

自動 CDN キャッシュ更新機能が有効になった後、バケット内のオブジェクトに対する変更を行うと、自動的に CDN キャッシュが更新されます。ただし、Alibaba Cloud CDN コンソールで CDN キャッシュを更新することができます。

"AccessDenied" エラー

セルフホストドメイン名をバケットにバインドした後、セルフホストドメイン名とリソースのパスで構成される URL (<http://mydomain.cn/test/1.jpg>など) を使用して対象の OSS リソースにアクセスできます。ただし、セルフホストドメイン名 (<http://mydomain.cn>など) のみで OSS にアクセスすると、OSS 静的 Web サイトの既定のページが構成されていないため、"AccessDenied" エラーが発生します。OSS 静的 Web サイトの既定ページを構成する方法の詳細については、「[静的 Web サイトのホスティング](#)」をご参照ください。

1.3.3 証明書のホスティング

HTTPS プロトコルを通して、OSS サービスにアクセスするため、自分のユーザードメイン名を使用したい場合は、デジタル証明書を購入する必要があります。任意の認証局 (CA) から証明書サービスを購入するか、[Alibaba Cloud SSL 証明書サービス](#) から証明書を購入し、OSS 上で証明書をホストします。

手順

- Alibaba Cloud CDN が有効になっていない場合

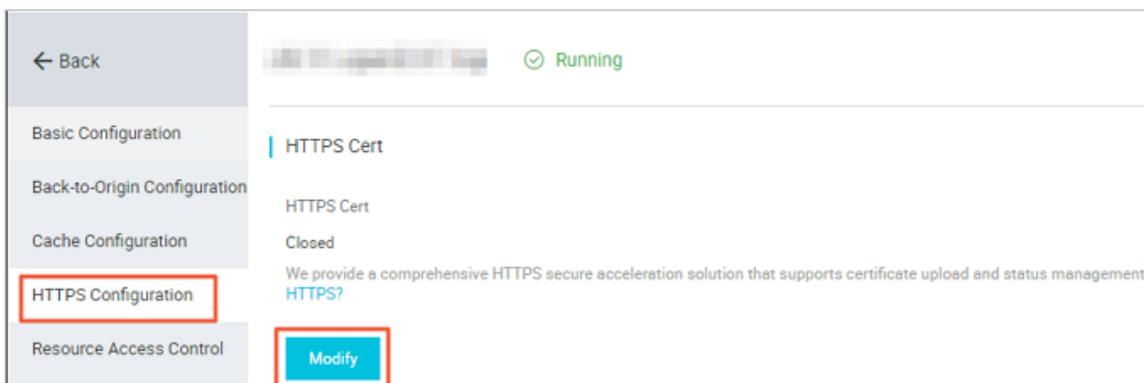
カスタムドメイン名を添付したら、次の手順に従って OSS コンソールで証明書をホストします。

1. OSS コンソールにログインします。左側のバケッリストで、証明書をホストするホスト名が付いたバケットをクリックします。
2. [ドメイン名] タブをクリックします。
3. 証明書をホストするドメイン名の右側にある、[証明書のアップロード] をクリックします。
4. 証明書のアップロード ページで、証明書の公開鍵と秘密鍵を入力し、[アップロード] をクリックします。

- Alibaba Cloud CDN の有効化

CDN アクセラレーションドメイン名を添付した後は、CDN コンソールで HTTPS 証明書を管理できます。

1. [CDN コンソール](#)にログインします。
2. **[ドメイン名]** をクリックします。証明書をホストするドメイン名を選択して、**[管理]** をクリックします。
3. **[HTTPS設定]** > **[変更]**の順にクリックします。



4. **[HTTPS 設定]** ダイアログボックスで、**[HTTPS Secure]**を有効にします。
5. 証明書を選択します。証明書タイプは、**[Alicloud Cert]**、**[Custom]**、**[Free Cert]**から選択できます。PEM 形式の証明書のみがサポートされています。

HTTPS Settings

ⓘ Generally, it takes 1 minutes for an updated HTTPS certificate to take effect across the network.

HTTPS Secure

Acceleration HTTPS Secure Acceleration is a value-added service, and will appear once it is enabled

Cert Type Alicloud Cert Custom Free Cert
Alibaba Cloud Security Certificate Service

Certificate Name

Content
-----BEGIN CERTIFICATE-----
MIIB...3DQE
BBi...
BA...CQko
xDI...
MA...XN0
MR...
ZXN0OGIvOGI1BYYW0tZ90RbD4XDTE0MTEVINDAZMDOvNV0

Pem encoding reference example

Private key
-----BEGIN RSA PRIVATE KEY-----
MIIB...EG9
rroS...
kg0...IOM
K+E...
ywc...8y0
SAy...
AoC...0Bt0

Pem encoding reference example

Confirm Cancel

- Alicloud Cert: ユーザーの SSL 証明書を選択します。
- Custom: 証明書名を設定した後、証明書と秘密鍵をアップロードする必要があります。アップロードされた証明書は、Alibaba Cloud SSL Certificates Service に保存されます。証明書の確認は[SSL証明書](#)で行います。
- Alibaba Cloud が提供する無料の Digicert DV SSL 証明書を選択することもできます。ただし、無料の CDN 証明書は CDN の HTTPS Secure Acceleration サービスにのみ適用されます。したがって、Alibaba Cloud SSL 証明書コンソールで無料証明書を設定する

ことはできず、無料証明書の公開鍵と秘密鍵を表示することもできません。無料の証明書が有効になるまで最大 10 分かかります。

- 購入した証明書が有効になるまで約 1 時間かかります。証明書が有効になると、HTTPS プロトコルを通して OSS リソースにアクセスできます。緑色の HTTPS マークが表示されている場合は、HTTPS Secure Acceleration サービスが有効になっていることを表しています。

1.4 静的 Web サイトのホスティング

静的 Web サイトをホストし、バケットドメイン名を通してこの静的 Web サイトにアクセスするようバケットを設定できます。

- デフォルトの Web ページが空白の場合、静的 Web サイトのホスティングは無効になります。
- 静的 Web サイトホスティングが有効になっている場合は、CNAME を使用してドメイン名をバインドすることを推奨します。
- 静的 Web サイトのルートドメイン、または URL 末尾が "/" で終わるドメインの URL に直接アクセスすると、デフォルトのホームページが返されます。



注：

インターネットを介して Web ファイルにアクセスするため、中国本土リージョンと香港リージョンで OSS エンドポイントを使用する場合、Content-Disposition: 'attachment=filename;' が自動的に応答ヘッダーに追加され、その Web ファイルが添付ファイルとしてダウンロードされます。ユーザードメインで OSS にアクセスする場合には、Content-Disposition: 'attachment=filename;' は、応答ヘッダーに追加されません。ユーザードメインを使用して OSS にアクセスする方法については、「[カスタムドメイン名のバインド方法](#)」をご参照ください。

詳しくは、「[静的 Web サイトホスティング](#)」をご参照ください。

手順

- [OSS コンソール](#)にログインします。
- 左側のバケット一覧から対象のバケット名 1 つをクリックし、バケットの概要ページを開きます。
- [基本設定] タブから [静的ページ] を見つけます。

4. **[設定]** をクリックし、以下のパラメーターを設定します。

- **Default Homepage:** Web サイトの index.html に相当するインデックスページ。バケットに保存されている HTML ファイルのみを使用できます。このフィールドを空白のままにした場合、デフォルトのホームページ設定は有効になりません。
- **Default 404 Page:** 誤ったパスにアクセスした場合、404 エラーページを返します。バケットに保存されている html、jpg、png、bmp、および webp ファイルだけを使用できます。このフィールドを空白のままにすると、デフォルトの 404 ページが無効になります。

5. **[保存]** をクリックします。

1.5 アンチリーチの設定

OSS は従量課金のサービスです。OSS 上のデータが盗難された場合に発生する追加コストを削減するため、OSS は HTTP ヘッダー内のリファラーフィールドに基づく アンチリーチ をサポートしています。バケットのリファラーホワイトリストを設定したり、空のリファラーフィールドでアクセス要求を許可するかどうかを設定したりできます。

手順

1. 「**OSS コンソール**」にログインします。
2. 左側のバケットリストで、アンチリーチを設定するバケットをクリックして、そのバケットの概要ページを開きます。
3. **[基本設定]** タブをクリックし、**[アンチリーチ]**、**[編集]** とクリックします。
4. 次の情報を入力します。リファラー URL をホワイトリストに1つ以上追加します。
 - キャリッジリターンにより URL を区切ります。
 - 空のリファラーを許可：空のリファラーを許可するかどうかを設定します。
5. **[保存]** をクリックします。

例

"test-1-001" という名前のバケットのリファラーホワイトリストを `http://www.aliyun.com` に設定します。リファラーホワイトリストが設定されると、リファラーの `http://www.aliyun.com` への要求のみが、"test-1-001" のオブジェクトにアクセスできます。

1.6 CORS ルールの設定

OSS は、HTML5 プロトコルによる Cross-Origin Resource Sharing (CORS) を提供することで、ユーザーがクロスオリジンアクセスを実現できるようにしています。OSS は、バケットに対す

るクロスオリジンアクセス要求 (または オプション要求) を受信すると、そのバケットに対する CORS ルールを読み取り、次に関連する権限を確認します。OSS はルールと要求を順番に照合し、要求を許可するために一致する最初のルールを使用して、対応するヘッダーを返します。どの規則も要求に一致しない場合は、返された結果に CORS のヘッダーは含まれません。

手順

1. 「[OSS コンソール](#)」にログインします。
2. 左側のバケットリストで、CORS ルールを設定するバケットの名前をクリックします。
3. **[基本設定]** タブをクリックします。クロスオリジン **Resource Sharing (CORS)** 領域で、**[設定]** をクリックします。
4. **[ルールを作成]** をクリックします。表示された **CORS** ルールダイアログボックスで、以下のパラメーターを設定します。

パラメーター	必須項目	説明
Source	はい	許可された CORS 要求の送信元を指定します。ソースに対して複数の一致ルールを設定します。複数のルールを別々の行に設定する必要があります。1つのルールで最大1つのアスタリスク (*) ワイルドカードを使用できます。ルールにアスタリスク (*) ワイルドカードのみが含まれている場合、すべての送信元からの CORS 要求が許可されます。
Allowed Methods	はい	許可されている CORS 要求メソッドを指定します。
Allowed Headers	いいえ	許可された CORS 要求に対する応答ヘッダーを指定します。許可されたヘッダーに対して複数の一致ルールを設定します。複数のルールは別々の行に設定する必要があります。1つのルールで最大1つのアスタリスク (*) ワイルドカードを使用できます。
Exposed Headers	いいえ	ユーザーがアプリケーションからアクセスすることを許可されている応答ヘッダー (JavascriptのXMLHttpRequest オブジェクト など) を指定します。公開ヘッダーではアスタリスク (*) は使用できません。

パラメーター	必須項目	説明
Cache Timeout	いいえ	指定のリソースに対するブラウザプリフェッチ 要求 (オプション) の結果を返すための キャッシュ時間を指定します。



注:

バケットには最大 10 個の CORS ルールを設定できます。

5. **[OK]** をクリックします。



注:

既存のルールを編集または削除することもできます。

1.7 ライフサイクルの設定

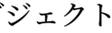
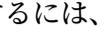
コンソールでキー名のプレフィックスを指定することで、バケット内のすべてまたは一部のオブジェクトのライフサイクルを定義および管理できます。ライフサイクルルールは通常、バッチファイル管理や自動フラグメント削除などの操作に適用されます。

- このような規則に一致するオブジェクトの場合、発効日から 2 日以内にデータが確実に消去または別の保管域タイプに変換されます。
- ライフサイクルルールに基づいてバッチで削除されたデータは復元できないため、そのようなルールを設定するときは注意します。

手順

1. **OSS コンソール**にログインします。
2. 左側のバケットリストで、対象バケットの名前をクリックして、バケットの概要ページを開きます。
3. **[基本設定]**タブをクリックし、**[ライフサイクル]**領域を見つけて、**[編集]** をクリックします。
4. **[ルールの作成]** をクリックして **[ライフサイクルルールの作成]** ダイアログボックスを開きます。

5. ライフサイクルルールの設定

- ステータス: ルールが有効か無効かにかかわらず、ルールのステータスを指定します。
- ポリシー: ポリシーに一致するオブジェクトを選択します。【プレフィックスによる照合】(オブジェクト名のプレフィックスによる照合)、または【バケットに適用】(バケット内のすべてのオブジェクトの照合)のいずれかを選択できます。
- **Prefix:** ポリシーに対して【プレフィックスによる一致】を選択した場合は、オブジェクト名のプレフィックスを入力します。たとえば、画像オブジェクトをバケットに保存し、画像オブジェクトの名前の前にを付けます。画像オブジェクトのライフサイクル管理を実行するには、このフィールドにと入力します。
- ファイルの削除
 - 有効期限: オブジェクトファイルが最後に変更されてから保持される日数を指定します。期限が切れると、システムはルールを起動してファイルを削除するか、別のストレージタイプ(低頻度アクセスまたはアーカイブ)に変換します。例えば、30日に設定されている場合、2016年1月1日に最後に変更されたオブジェクトは、2016年1月31日にバックエンドプログラムによってスキャンされ、削除されるか、または別のストレージタイプに変換されます。設定オプションは次のとおりです。
 - 指定日後にIAに切り替えられます。
 - 指定日後にアーカイブへと切り替えられます。
 - 指定した日数後にすべてのオブジェクトを削除します。



注:

ストレージクラスが変換されたオブジェクトに関する請求情報については、「[Manage object lifecycle](#)」をご参照ください。

- 有効期限: 指定された日付より前に最後に変更されたすべてのファイルを削除するか、それらを別のストレージタイプ(低頻度アクセスまたはアーカイブ)に変換します。たとえば、2012年12月21日に設定されている場合、この日付より前に最後に変更された

オブジェクトはスキャンされ、削除されるか、バックエンドプログラムによって別のストレージタイプに変換されます。構成オプションは次のとおりです。

- 指定日後に IA に切り替えられます。
- 指定日後にアーカイブに切り替えられます。
- 指定した日付より前にファイルを削除
 - 無効化: ファイルの自動削除またはストレージタイプの変換を無効にします。
- フラグメントの削除
 - 有効期間: マルチパートアップロードイベントが初期化されてから保持される日数を指定します。期間が終了すると、システムはルールを起動してイベントを削除します。たとえば、30 日に設定されている場合、2016 年 1 月 1 日に初期化されたイベントは、2016 年 1 月 31 日にバックエンドプログラムによってスキャンおよび削除されます。
 - 有効期限: 指定された日付より前に初期化されたすべてのマルチパートアップロードイベントを削除します。2012 年 12 月 21 日に設定されている場合、この日付より前に初期化されたアップロードイベントは、バックエンドプログラムによってスキャンおよび削除されます。
 - 無効化: フラグメントの自動削除を無効にします。

6. [OK]をクリックします。



注:

ライフサイクルルールが正常に保存されたら、ポリシーリストで **[編集]** または **[削除]** できます。

1.8 リージョン間レプリケーションの設定

リージョン間レプリケーションは、異なるリージョンのバケット間でオブジェクトを自動的にかつ非同期的にコピーするために使用されます。ソースバケット内のオブジェクトに対する変更 (作成、置換、および削除) は、対象のバケットと同期されます。



注:

現在、リージョン間レプリケーション機能は、中国本土の異なるリージョン間でのみサポートされています。

手順

1. [OSS コンソール] にログインします。

2. 左側のバケットリストで、リージョン間レプリケーションを設定するバケットの名前をクリックします。
3. [基本設定] タブをクリックし、[リージョン間レプリケーション (CRR)] のリージョンを見つけてます。
4. [有効にする] をクリックして、[リージョン間レプリケーション (CRR)] ダイアログボックスを開きます。
5. 対象のバケットのリージョンと名前を選択します。



注:

- 同期しているソースバケットと対象のバケットは、異なるリージョンにある必要があります。
- リージョン間レプリケーションが有効になっている2つのバケットを、他のバケットと同期させることはできません。

6. [適用先] には、次の2つのオプションから選択します。
 - ソースバケット内のすべてのファイル: バケット内のすべてのオブジェクトを対象のバケットと同期させます。
 - 指定されたプレフィックスを持つファイル: バケット内の指定されたプレフィックスを持つオブジェクトを、対象のバケットと同期させます。たとえば、バケットのルートディレクトリに "management" という名前のフォルダがあり、"management" の中に "abc" という名前のフォルダがあるとします。"abc" フォルダ内のオブジェクトを同期する場合は、"management/abc" をプレフィックスとして追加します。最大5つのプレフィックスを追加できます。
7. 次の [操作] オプションから選択します。
 - 追加/削除/変更: バケット内のすべてのデータ (追加、変更、削除の操作を含む) を対象のバケットに同期させます。
 - 追加/変更: バケット内の追加または変更されたデータのみを対象バケットに同期させます。
8. 履歴データを複製するかどうかを選択します。



注:

履歴データの複製を有効にすると、ソースバケットから複製されたオブジェクトが、対象のバケット内の同じ名前のオブジェクトを上書きする可能性があります。そのため、複製前にソースバケットと対象のバケットのデータが一致していることを確認します。

9. **[OK]** をクリックします。



注：

- ・ 設定が完了してから、リージョン間レプリケーションが有効になるまでに3分から5分かかることがあります。同期に関する情報は、ソースバケットが同期された後に表示されます。
- ・ リージョン間レプリケーションでは、データは非同期的に複製されます。そのため、データサイズに応じてデータを対象のバケットに複製するのに通常数分または数時間かかります。

1.9 Back-to-origin ルールの設定

Back-to-origin ルールを設定することで、発信元データをミラーリングとリダイレクトのどちらで取得するかを定義できます。Back-to-origin ルールは通常、データのホットマイグレーションと特定のリクエストのリダイレクトに使用されます。順番に実行される、最大5つまでの Back-to-origin ルールを設定できます。



注：

Back-to-origin はイントラネットエンドポイントをサポートしません。

手順

1. [OSS コンソール](#) にログインします。
2. 左側にあるいずれかのバケット名をクリックします。
3. **[基本設定]** をクリックし、**Back-to-origin** 領域を見つけ、**[編集]** をクリックします。
4. **[規則の作成]** をクリックします。
5. **[ミラーリング]** または **[リダイレクト]** をクリックします。
 - ・ **[ミラーリング]** を選択し、要求されたファイルが OSS 上に見つからない場合、OSS は自動的にファイルをソースから取り出してローカルに保存し、そのコンテンツを要求者に返します。
 - ・ **[リダイレクト]** を選択した場合、OSS は前提条件を満たすリクエストを HTTP 経由でオリジン URL にリダイレクトし、ブラウザまたはクライアントはコンテンツをオリジンから要求者に返します。
6. 前提条件と **Origin URL** を設定します。ミラーリングモードでは、**[queryString]** の転送を有効にするかどうかを選択できます。リダイレクトモードでは、**[リダイレクトコード]** を設定できます。

7. ミラーリングモードでは、HTTP ヘッダーの送信ルールを設定できます。

設定例は次のとおりです。

Set transmission rule of HTTP header ②

Allow Transmit all HTTP headers Transmit the specified HTTP header

* ×

Add(9)

Deny Prohibit the transmission of specified HTTP header

* ×

Add(9)

Configure Set the specified HTTP header parameter

* :

Add(9)

OSS に送信された要求内の HTTP ヘッダーが次のとおりであるとしてします。

```
GET /object
host : bucket.oss-cn-hangzhou.aliyuncs.com
aaa-header : aaa
bbb-header : bbb
ccc-header : 111
```

Back-to-origin がトリガーされた後、OSS がオリジンに送信する要求は次のとおりです。

```
GET /object
host : source.com
aaa-header : aaa
ccc-header : ccc
```

 注：
次の HTTP ヘッダーは送信ルールをサポートしていません。

- 以下のプレフィックスを持つヘッダー
 - X-OSS-
 - oss-
 - x-drs-
- 以下のような、全ての標準 HTTP ヘッダー
 - content-length
 - authorization2
 - authorization
 - range
 - date

8. **[OK]** をクリックします。



注：

ルールを保存した後は、設定したルールをルールリストに表示して、対応する編集または解除操作を実行できます。

1.10 バケットの削除

不要になったバケットを削除して、ストレージコストを節約することができます。

前提条件

バケットを削除する前に、バケット内のすべてのオブジェクト (マルチパートアップロードタスクで生成されたフラグメントを含む) が削除されていることを確認します。バケット内のオブジェクトが削除されていないと、バケットを削除できません。



注：

- バケット内のすべてのオブジェクトを削除する場合、バケットの [ライフサイクルの設定](#) を推奨します。
- フラグメントを削除する方法の詳細は、「[フラグメントの管理](#)」をご参照ください。

手順

1. [OSS コンソール](#) にログインします。
2. 左側のバケットリストで、削除するバケットをクリックし、**[基本設定]** タブをクリックします。

3. **[Bucket 管理]** セクションで、**[バケットを削除する]** をクリックします。
4. 表示されたダイアログボックスで、**[OK]** をクリックします。



警告：

削除したバケットは復元できないので、バケットの削除は慎重に行ってください。

1.11 アクセス制御

1.11.1 バケット ACL の変更

OSS には、権限を制御するためのアクセス制御リスト (ACL) があります。バケットの作成時に ACL を設定し、バケットの作成後に ACL の内容を変更することができます。バケットに ACL を設定しない場合、バケットのデフォルト ACL は "非公開" です。

このトピックでは、バケットレベルでアクセス制御を変更する方法について説明します。

手順

1. [OSS コンソール](#) にログインします。
2. 左側のバケット一覧から、目的のバケットをクリックし、バケットの概要ページを開きます。
3. **[基本設定]** タブをクリックし、**[ACL]** を見つけます。
4. **[設定]** をクリックし、バケット ACL を変更します。

OSS ACL はバケットレベルのアクセス制御を提供します。現在、バケットには 3 つのアクセス許可があります。

- **非公開:** バケット内のオブジェクトに対して読み取りと書き込み操作を実行できるのはバケットの所有者だけです。他のユーザーはオブジェクトにアクセスできません。
- **公開読み取り:** バケット内のオブジェクトに対して、誰でも (匿名ユーザーを含む) 書き込み操作が実行できます。データの漏洩が発生したり、料金がかかりすぎたりする可能性があります。
- **公開読み書き:** 誰でも (匿名ユーザーを含む) 読み取りおよび書き込み操作をバケット内のオブジェクトに対して実行することができます。なお、不正な情報が悪意を持ってバケット内のオブジェクトに書き込まれると、あなたの権利が損なわれる可能性があります。したがって、特殊な場合を除き、バケットの ACL を "Public Read/Write" に設定しないことを推奨します。

5. **[保存]** をクリックします。

1.12 基本的な設定

2 オブジェクトの管理

2.1 概要

OSS では、ユーザー操作の基本データ単位はオブジェクトです。1つのオブジェクトのサイズは、48.8 TB に制限されています。1つのバケットには、無制限の数のオブジェクトを含めることができます。

あるリージョンにバケットを作成した後、そのバケットにアップロードされたオブジェクトは、意図的に別のリージョンにオブジェクトを転送しない限り、このリージョンに保持されます。

Alibaba Cloud OSS リージョンに格納されているオブジェクトは、このリージョンに物理的に保持されます。OSS はコピーを保持したり、オブジェクトを他のリージョンに移動したりすることはありません。ただし、権限があれば、どこからでも各オブジェクトにアクセスすることができます。

OSS にオブジェクトをアップロードするには、バケットへの書き込み権限が必要です。コンソールでは、アップロードされたオブジェクトはファイルまたはフォルダーとしてユーザーに表示されます。この章では、コンソールを使用してファイルとフォルダを作成、管理、削除方法について説明します。

2.2 フォルダーの作成

Alibaba Cloud OSS にはフォルダーという用語はありません。すべての要素はオブジェクトとして格納されます。OSS コンソールでフォルダーを使用するには、サイズが 0 のオブジェクトを作成し、最後にスラッシュ (/) を付けて同じ種類のファイルをソートし、それらをバッチ処理します。デフォルトでは、OSS コンソールはスラッシュで終わるオブジェクトをフォルダーとして表示します。これらのオブジェクトは通常どおり、アップロードおよびダウンロードができます。OSS コンソールでは、Windows オペレーティングシステムのフォルダーを使用するのと同じように、OSS フォルダを使用できます。



注：

データが含まれているかどうかにかかわらず、OSS コンソールはスラッシュで終わるオブジェクトをフォルダーとして表示します。オブジェクトをダウンロードするには、API (Application Programming Interface) または SDK (Software Development Kit) のいずれかを使用する必要があります。

手順

1. [OSS コンソール] にログインします。
2. クリックして対象のバケットを開きます。
3. [ファイル] タブをクリックします。
4. 「ディレクトリを作成」をクリックして、ディレクトリ名を入力します。
5. [OK] をクリックします。

2.3 オブジェクトの検索

このセクションでは、OSS コンソールを使用して、バケットまたはフォルダー内の同じ名前のプレフィックスを持つオブジェクトを検索する方法について説明します。

名前のプレフィックスで検索を実行すると、検索文字列では大文字と小文字が区別され、スラッシュ (/) を含めることはできません。検索範囲は、現在のバケットのルートレベルまたはサブフォルダとその中のオブジェクトは除いた現在のフォルダー内のオブジェクトに限定されます。OSS でスラッシュ (/) を使用方法の詳細については、「[オブジェクトの一覧表示](#)」をご参照ください。

手順

1. [OSS コンソール] にログインします。
2. クリックして対象のバケットを開きます。
3. [ファイル] をクリックします。
4. 検索ボックスに "abc" などの検索プレフィックスを入力し、Enter キーを押すか、[検索アイコン] をクリックします。

システムは、バケットのルートディレクトリ内の "abc" というプレフィックスが付いたオブジェクトとフォルダーの名前を一覧表示します。



注:

フォルダーを検索するには、フォルダーを開き、検索ボックスに検索プレフィックスを入力します。システムは、フォルダーのルートディレクトリ内の、検索したプレフィックスに一致するオブジェクトおよびフォルダーの名前を一覧表示します。

2.4 ACL オブジェクトの変更

OSS には、権限制御用のアクセス制御リスト (Access Control List: ACL) があります。ファイルをアップロードするときに ACL を設定し、ファイルをアップロードした後に ACL を変更できます。ACL が設定されていない場合、既定値は "非公開" です。

OSS ACL は、バケットレベルとファイルレベルのアクセス制御を提供します。現在、OSS ACL には 3 つのアクセス 許可があります。

- 非公開: バケット内のファイルに対して読み取りおよび書き込み操作を実行できるのは、バケットの作成者だけです。他のユーザーはバケット内のファイルにアクセスできません。
 - バケットの読み取りおよび書き込み権限が "非公開" の場合は、ファイルアクセス URL を取得するときに、リンクの有効期間を設定する必要があります。
 - 署名付き URL の有効期間は、NTP に基づいて計算されます。有効期間内にファイルへのアクセスに署名付き URL を使用できるビジターには、このリンクを提供することができます。バケットに "非公開" の許可がある場合、取得されたアドレスは「#unique_41」を使用して生成されます。
- 公開読み取り: バケットの所有者だけがバケット内のファイルに対して書き込み操作を実行できます。誰でも (匿名の訪問者を含む) ファイルの読み込みを実行できます。
- 公開読み書き: 誰でも (匿名訪問者を含む)、バケット内のファイルに対して、読み取りおよび書き込みを実行できます。読み取りもしくは書き込みによって発生する料金はバケットの所有者が負担するため、この許可は慎重に使用してください。

手順

1. [OSS コンソール] にログインします。
2. 左側のバケットリストで、対象のバケットの名前をクリックして、バケットの概要ページを開きます。
3. [ファイル] タブをクリックします。
4. 対象のファイルの名前をクリックして、ファイルのプレビューページを開きます。
5. ファイルの読み取りおよび書き込み権限を変更するには、[ACLの設定] をクリックします。
 - バケットの読み取りおよび書き込み権限が "非公開" の場合、ファイルアクセス URL を取得するときにリンクの有効期間を設定する必要があります。
 - 対象のファイルの [プレビュー] ページで、[署名] フィールドにリンクの有効期間 (秒単位) を入力します。
6. [OK] をクリックします。

2.5 バケットポリシーを使用した他のユーザーに対する OSS リソースへのアクセス許可

バケットポリシーを使用して、他のユーザーが自分の OSS リソースにアクセスすることを許可できます。

RAM ポリシーと比較すると、バケットポリシーは、グラフィカルなコンソール上にてアクセス許可を行うことができ、バケット所有者によってアクセス許可を直接設定することができます。次の一般的なシナリオで、バケットポリシーを使用します。

- 他のアカウントの RAM ユーザーに、OSS リソースへのアクセスを許可します。
他のアカウントの RAM ユーザーに、OSS リソースへのアクセスを許可します。
- 指定の IP アドレスまたは IP 範囲を使用して、匿名ユーザーに対して OSS リソースへのアクセスを許可します。

場合により、匿名ユーザーに指定の IP アドレスまたは IP 範囲を使用して OSS リソースへのアクセスを許可しなければならないことがあります。たとえば、企業の機密文書は、その企業内でのみアクセスでき、他の地域からはアクセスできません。多数の内部ユーザーがいるため、すべてのユーザーに対して RAM ポリシーを設定するには多大な労力が必要です。この場合、バケットポリシーに基づいて IP 制限を使用してアクセスポリシーを設定し、ユーザーを簡単かつ効率的に権限付与できます。

他のアカウントの RAM ユーザーに対する、OSS リソースへのアクセス許可

1. **OSS コンソール** にログインします。
2. 左側のバケットリストで、ユーザーにアクセスを許可するバケットの名前をクリックします。
3. バケットの概要ページで、**[ファイル]** タブをクリックし、**[権限付与]** をクリックします。
4. **[権限付与]** ページで、**[許可]** をクリックします。
5. **[権限付与]** ページで、**Applied To** を設定します。
 - **バケット全体**: 許可ポリシーはバケット全体に適用されます。
 - **指定リソース**: 許可ポリシーはバケット内の指定リソースにのみ適用されます。このオプションを選択した場合は、abc/myphoto.png など、指定したリソースのパスを入力する必要があります。ポリシーがディレクトリに適用される場合は、パスの末尾に "abc/*" のようにアスタリスク (*) を追加する必要があります。
6. アカウントは、次のオプションから選択します。
 - **サブアカウント**: 現在のアカウントの下にある RAM ユーザーをドロップダウンリストから選択して、バケットへのアクセス許可を付与します。このオプションを選択するに

は、Alibaba Cloud アカウントにてログインするか、もしくはバケットに対する管理権限および RAM コンソールに対する ListUsers 権限を持つ RAM ユーザーとして、コンソールにログインする必要があります。

- 他のアカウント: 他のアカウントにバケットアクセス権限を付与する場合、または自分のアカウントに ListUsers 権限がない場合は、権限を付与するアカウントの UID を入力します。
- 匿名アカウント (*): すべてのユーザーに権限を付与したい場合は、匿名アカウント (*) を選択できます。



注:

ListUsers 権限を RAM ユーザーに付与するには、「[RAM ユーザーの権限付与](#)」をご参照ください。

-
- 次のコードテンプレートは、ListUsers 権限を RAM ユーザーに付与するためのものです。

```
{
  "Version": "1",
  "Statement": [
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": [
        "ram:ListUsers"
      ],
      "Resource": [
        "*"
      ],
      "Condition": {}
    }
  ]
}
```

7. Authorized Operation の設定

- Read-Only: 認証されたユーザーはリソースを表示、一覧表示、およびダウンロードできません。
- Read/Write: 認証されたユーザーはリソースを読み書きできます。
- Any Operation: 認証ユーザーは、リソースに対してどんな操作も実行できます。
- None (Deny): 認証されたユーザーはリソースに対していかなる操作も実行できません。



注:

1 人のユーザーに対して複数のバケットポリシーが設定されている場合、ユーザーのアクセスはこれらのポリシーの組み合わせによって決まります。ただし、いずれかのポリシーで None (Deny) に設定されている場合、ユーザーはいかなる操作も実行できません。たとえば、ユーザーの認証されている操作が、バケットポリシーで Read Only、別のポ

リシーではRead/Write に設定されている場合、ユーザーはRead OnlyアクセスとRead/Writeアクセスの組み合わせのRead/Write アクセスがあります。ユーザーの認証されている操作が、別のポリシーでNone (Deny) に設定されている場合、そのユーザーはNone (Deny) アクセス権しかありません。

8. (オプション) 指定された IP アドレスのみを使用して、OSS リソースにアクセスすることをユーザに許可するように、**Conditions** を設定します。OSS リソースへのアクセスに使用される IP アドレスまたは IP 範囲を、許可または禁止にするため、IP is またはIP is not を選択できます。
 - 10.10.10.10 のように、IP アドレスまたは複数の IP アドレスを条件として指定できます。複数の IP アドレスはカンマ (,) で区切ります。
 - 10.10.10.1/24 のように、IP 範囲を条件として指定することもできます。
9. **[OK]** をクリックします。

指定の IP アドレスまたは IP 範囲を使用して、匿名ユーザーに OSS リソースへのアクセスを許可

1. [OSS コンソール](#) にログインします。
2. 左側のバケットリストで、ユーザーにアクセスを許可するバケットの名前をクリックします。
3. バケットの概要ページで、**[ファイル]** タブをクリックし、**[許可]** をクリックします。
4. **[権限付与]** ページで、**[許可]** をクリックします。
5. **[権限付与]** ページで、**Applied To** を設定します。
 - バケット全体: 許可ポリシーはバケット全体に適用されます。
 - Specified Resource: 許可ポリシーはバケット内の指定リソースにのみ適用されます。このオプションを選択した場合は、abc/myphoto.png など、指定したリソースのパスを入力する必要があります。ポリシーがディレクトリに適用される場合は、パスの末尾に abc/*" のようにアスタリスク (*) を追加する必要があります。
6. **Accounts** フィールドで、**[匿名ユーザー (*)]** をクリックします。



警告:

匿名ユーザーに OSS リソースへのアクセスを許可する場合は、IP アドレス条件を設定することを強く推奨します。IP アドレス条件を設定しないと、リソースはどのユーザからもアクセスできるようになります。

7. Authorized Operation の設定

- Read-Only: 認証されたユーザーはリソースを表示、一覧表示、およびダウンロードできます。
- Read/Write: 認証されたユーザーはリソースを読み書きできます。
- Any Operation : 認証ユーザーは、リソースに対してどんな操作も実行できます。
- None (Deny): 認証されたユーザーはリソースに対していかなる操作も実行できません。



注:

複数のバケットポリシーが一部のユーザーに設定されている場合、ユーザーのアクセスはこれらのポリシーの組み合わせによって決まります。ただし、いずれかのポリシーで None (Deny) に設定されている場合、ユーザーはいかなる操作も実行できません。たとえば、一部のユーザーに対する認証されている操作が、バケットポリシーで Read Only、別のポリシーでは Read/Write に設定されている場合、ユーザーは Read/Write アクセスと Read Only アクセスの組み合わせの Read/Write アクセスがあります。ユーザーの認証されている操作が、別のポリシーで None (Deny) に設定されている場合、そのユーザーは None (Deny) アクセス権しかありません。

8. Conditions の設定 OSS リソースへのアクセスに使用される IP アドレスまたは IP 範囲を、許可または禁止にするため、IP is または IP is not を選択できます。

- 10.10.10.10 のように、IP アドレスまたは複数の IP アドレスを条件として指定できます。複数の IP アドレスはカンマ (,) で区切ります。
- 10.10.10.1/24 のように、IP 範囲を条件として指定することもできます。

9. [OK]をクリックします。

2.6 オブジェクトのダウンロード

オブジェクトをバケットにアップロードすると、そのオブジェクトの URL を取得してダウンロードや、他のユーザーと共有などが可能になります。

オブジェクトがバケットにアップロードされている必要があります。詳しくは、[オブジェクトのアップロード](#)をご参照ください。

1. [OSS コンソール](#)にログインします。
2. バケット名のリストで、作成したバケットの名前をクリックします。
3. バケットの概要ページで、ファイル タブをクリックします。

4. ダウンロードまたは共有するオブジェクトの名前をクリックするか、オブジェクトの右側にあるプレビューをクリックします。プレビューページには、次のオプションがあります。

- **ダウンロード**：オブジェクトをローカルストレージデバイスにダウンロードします。
必要なオブジェクト数に応じて、次の方法でオブジェクトをダウンロードすることもできます。
 - **複数のオブジェクトをダウンロード**：ファイル タブページで、複数のオブジェクトを選択してから、一括操作 > ダウンロード を選択します。
 - **単一オブジェクトをダウンロード**：ファイル タブページで、オブジェクトを選択してから、詳細 > ダウンロード を選択します。
- **ファイル URL を開く**：ブラウザでオブジェクトを表示します。ブラウザで表示できないオブジェクト（Excel ファイルなど）は、URL を開くとダウンロードされます。

**警告：**

バケットにリファラーホワイトリストが設定されていて、空のリファラーが許可されていない場合、その URL をブラウザで直接開くことはできません。

- **ファイル URL のコピー**：他のユーザーでオブジェクトの表示、ダウンロードできるようにするには、オブジェクトの URL をコピーして共有します。

また、次の方法でファイルの URL を取得することもできます。

- **1 ファイル以上の URL の取得**：ファイルページで、1 つ以上のファイルを選択してから、一括操作 > **URL** リストのエクスポートを選択します。
- **1 ファイルの URL の取得**：ファイルページでファイルを選択し、詳細 > **ファイル URL** のコピーを選択します。

ACL が非公開のオブジェクトの URL を共有する場合は、オブジェクトの URL を取得するときにプレビューページで **有効期間** を設定する必要があります。有効期間のデフォルト値は 3,600 秒で、最大値は 64,800 秒です。

**注：**

- 署名付き URL の有効期間は、NTP に基づいて計算されます。有効期間内に他のユーザーでオブジェクトにアクセスできるようにするには、オブジェクトの署名付き URL を共有できます。オブジェクトの ACL が非公開の場合は、バケットに格納されているオブジェクトの URL に署名が追加されます。詳細は、[#unique_41](#) をご参照ください。

- バケットとオブジェクトの ACL を変更する方法の詳細については、[バケット ACL の変更とオブジェクト ACL の変更](#)をご参照ください。
- ファイルパスのコピー：オブジェクトのパスをコピーします。オブジェクトを検索するとき、またはオブジェクトに透かしを追加するときにパスを使用できます（画像の場合）。

2.7 シンボリックリンクの設定

オブジェクトの取得を容易にするために、対象のバケット内の頻繁にアクセスされるオブジェクトを指定するシンボリックリンクを設定します。オブジェクトにシンボリックリンクを設定したら、そのシンボリックリンクを使用してそのオブジェクトにすばやくアクセスできます。シンボリックリンクは、Windows のショートカットと同じように機能します。

1. [OSS コンソール](#)にログインします。
2. 左側のバケットリストで、対象のオブジェクトが格納されているバケットの名前をクリックし、**[ファイル]** タブをクリックします。
3. シンボリックリンクを設定するオブジェクトを見つけて、オブジェクトの右側にある、**[詳細]** > **[ソフトリンクの設定]** を選択します。

4. [ソフトリンクの設定] ダイアログボックスで、シンボリックリンクファイルの名前を入力して、**[OK]** をクリックします。

Set soft link

① Once the soft link is created, you can access the contents of the source file via the soft link file address (URL).

Source file (full path) user/myphoto/myphoto.jpg

Soft link file 0/254

Soft link file naming convention:

Example: current directory `filename` or specified directory `aaa/bbb/filename`.

1. Emoji is not allowed.
2. `/` is used to split the path, do not start or end with `/`, do not appear continuous `/`.
3. Subdirectories named `..` are not allowed.
4. The total length is controlled by 1-254 characters.

- ソースファイル (フルパス): 現在のオブジェクトのフルパスがここに表示されます。
- ソフトリンクファイル: シンボリックリンクの命名規則に準拠するシンボリックリンクの名前を入力します。シンボリックリンクファイル名を入力するときは、スラッシュ (/) を使用して、ファイルパスを追加します。
 - ファイルパスを追加しない場合は、カスタマイズしたシンボリックリンクファイル名を直接入力します。例: 完全なソースファイルパスが user/myphoto/myphoto.jpg の場合、シンボリックリンクファイルに myphoto または myphoto.jpg という名前を付ける

ことができます。そして、シンボリックリンクファイルはルートディレクトリに格納されます。

- ファイルパスを追加する場合は、シンボリックリンクファイルの名前を入力するときに、スラッシュ (/) を使用してファイルパスを追加します。例: 完全なソースファイルパスが user/myphoto/myphoto.jpg の場合、シンボリックリンクファイルに shortcut/myphoto または shortcut/myphoto.jpg という名前を付けることができます。そして、シンボリックリンクファイルを#####ディレクトリに格納します。



:

シンボリックリンクファイルにファイルタイプを示すサフィックスが含まれていない場合、たとえば、ソースファイル myphoto.jpg のシンボリックリンクファイル名が myphoto と命名されている場合は、コンソールでシンボリックリンクファイルを開くか、その URL からファイルにアクセスしてファイルを開きます。ただし、シンボリックリンクファイルをダウンロードする場合は、ファイルの種類を示すサフィックスをファイル名に追加する必要があります。

2.8 オブジェクトの削除

OSS コンソールで、1つのオブジェクトまたは複数のオブジェクト (一度に最大 1,000 個) を削除できます。より柔軟な方法でオブジェクトを選択して削除する場合、または一度に 1,000 個を超えるオブジェクトを削除する場合は、「OSS 開発者ガイド」の[オブジェクトの削除](#)をご参照ください。

**警告:**

削除したオブジェクトを元に戻すことはできません。この操作を行う場合は注意してください。

手順

1. [OSS コンソール](#)にログインします。
2. 左側のバケットリストで、対象のバケットの名前をクリックします。
3. バケットの概要ページでファイルタブをクリックします。
4. 1つ以上のオブジェクトを選択してから、バッチ操作 > 削除を選択します。削除したいオブジェクトの右側にある、詳細 > 削除を選択することもできます。
5. 表示されるダイアログボックスで、**OK** をクリックします。

2.9 フォルダーの削除

OSS コンソールでフォルダーを削除すると、そのフォルダー内のすべてのファイルとサブフォルダーが自動的に削除されます。ファイルを保持したい場合は、フォルダーを削除する前に他の場所へ移動してください。

手順

1. 「[OSS コンソール](#)」にログインします。
2. クリックして対象のバケットを開きます。
3. [ファイル] をクリックします。
4. 対象のフォルダーを選択し、[削除] をクリックします。



注:

フォルダーに含まれるファイルが多すぎると、削除に失敗することがあります。

5. [OK] をクリックしてフォルダーを削除します。

3 ログの管理

3.1 ログの設定

OSS にアクセスすると、多数のアクセスログが生成されます。バケットのログ機能を有効にすると、OSS はその日のバケットのアクセスログを自動的に記録し、指定された命名規則に従ったオブジェクトにログを書き込み、指定した対象のバケットにそのオブジェクトを格納します。詳しくは、『OSS 開発者ガイド』「[日志存#](#)」をご参照ください。



注：

この機能を正しく動作させるするには、有効化された [AccessKey](#) のペアが、アカウントで使用可能であることを確認します。

手順

1. [OSS コンソール](#) にログインします。
2. 左側のバケットリストで、ログ記録機能を設定するバケットの名前をクリックします。
3. 基本設定タブをクリックして、ログ]の領域を見つけます。
4. **[設定]** をクリックし、**[宛先バケット]** と **[ログプレフィックス]** を設定します。
 - ・ 宛先バケット: ドロップダウンリストで、ログを保存するために使用されるバケットの名前を選択します。自分が所有しているバケットで、ログ機能が有効になっているバケットと同じリージョンにあるバケットのみを選択できます。
 - ・ ログプレフィックス: ログが保存されているディレクトリとログのプレフィックスを入力します。たとえば、log/<TargetPrefix> と入力すると、ログは log/ ディレクトリに保存されます。
5. **[保存]** をクリックします。

ログ命名規則

次の例は、アクセスログを格納するオブジェクトの命名規則を説明するためのものです。

<TargetPrefix><SourceBucket>YYYY-MM-DD-HH-MM-SS-<UniqueString>

- ・ <TargetPrefix> は、指定されたログプレフィックスを表します。
- ・ <SourceBucket> は、ソースバケットの名前を表します。
- ・ YYYY-MM-DD-HH-MM-SS: ログが作成された時刻を示します。YYYY は年、MM は月、DD は日、HH は時間、MM は分、SS は秒を示します。

- <UniqueString> は、OSS によって生成された文字列を示します。

たとえば、OSS アクセスログを格納するために使用されるオブジェクトの名前は次のとおりです。

MyLog-OSS-example2015-09-10-04-00-00-0000

- MyLog は、指定されたログプレフィックスです。
- oss-example は、ソースバケットの名前です。
- 2015-09-10-04-00-00 は、ログが作成された時刻を表します。
- 0000 は、OSS によって生成された文字列です。

3.2 ログ分析

ログ分析は、有料のサービスです。ログ分析サービスの料金については、「[Log Service Pricing](#)」をご参照ください。

OSS ユーザーは、アクセスログやリソース消費に関するデータの分析が必要になることがよくあります。以下に例を示します。

- OSS ストレージ、トラフィック、リクエストの使用状況
- ファイルのライフサイクル (作成、変更、削除) 中に生成されたログ
- 使用頻度の高いファイル、これらのファイルへのアクセス、およびアクセスによって生成されたトラフィック
- エラー、およびエラーリクエストを含むログのリスト

OSS コンソールでログ分析機能を使用して、大量のログを分析できます。このドキュメントでは、OSS コンソールでログ分析サービスをアクティブにし、使用方法について説明します。

手順

1. Log Service をアクティブにします。
 - a. [OSS コンソール](#)にログインします。
 - b. データ処理 フィールドで、ログ分析を見つけ、マウスマウスカーソルをログ分析のアイコンに移動し[**Log Service** をアクティブにする] をクリックします。
 - c. アクティブ化のページで、[同意する] を選択し、[アクティブにする] をクリックします。

2. OSS からデータを取得できるように Log Service を許可します。

- a. OSS コンソールで、左上隅の【概要】をクリックして、ページをリフレッシュします。マウスカーソルをログ分析のアイコンに移動し、【ログの収集を許可】をクリックします。



注：

許可の前に、OSS コンソールで【概要】をクリックして、ページをリフレッシュする必要があります。

- b. クラウドリソースアクセス権限付与 ページで、許可するロールが **AliyunLogArchiveRole** であることを確認し、【権限付与】をクリックします。

3. ログ分析サービスとバケットを関連付けます。

- a. OSS コンソールで、左上隅の【概要】をクリックして、ページをリフレッシュします。マウスカーソルを【ログ分析】のアイコンに移動し、【管理】をクリックします。



注：

Log Service を管理する前に、OSS コンソールで **【概要】** をクリックして、ページをリフレッシュする必要があります。

- b. ログ分析 ページで、**【関連付けの作成】** をクリックします。
- c. ログ分析の関連付けを作成 ページが右側に表示されます。ステップ 1 では、**【リージョン】** を選択し、**【プロジェクト名】** と **【プロジェクトの説明】** (オプション) を入力して、**【次へ】** をクリックします。

以下の 2 点に注意してください。

- **【リージョン】** を選択するときは、使用可能なバケットが作成されているリージョンを選択する必要があります。
 - **【プロジェクト名】** を選択するときは、次の規則に従わなければなりません。
 - プロジェクト名には、小文字、数字、ハイフンのみを含めることができます。
 - プロジェクト名の先頭と末尾は、小文字または数字にする必要があります。
 - プロジェクト名の長さは、3~63 文字です。
- d. ステップ 2 では、**Logstore** 名 を入力し、**【データ保持日数】** と **【パーティション (シャード数)】** を選択して、**【次へ】** をクリックします。

入力する項目と選択する項目は、以下のとおりです。

- **Logstore** 名: Logstore の名前。次の規則に従わなければなりません。
 - Logstore 名には、小文字、数字、ハイフン、アンダースコアのみを含めることができます。
 - Logstore 名の先頭と末尾は、小文字または数字にする必要があります。
 - Logstore 名の長さは、3~63 文字です。
 - **データ保持日数**: データの保存日数
 - **パーティション (シャード数)**: 詳しくは、「」、「[Partition](#)」、「」をご参照ください。
- e. ステップ 3 では、**【バケットを関連付ける】** を選択して、**【提出する】** をクリックします。
4. インデックス情報を設定します。
 - a. **Log Service** に移動して**インデックスを作成** をクリックします。
 - b. 特別な要件がない場合は、基本設定と既定の設定を変更しないで、**【次へ】** をクリックします。



注:

インデックス情報を個々に設定したい場合は、「」、「[Index and query](#)」、および「」をご参照ください。

- c. ログデータの転送と ETL 機能を設定します。ログデータを転送する必要がない場合は、**[OK]** をクリックします。ログデータを転送する場合は、必要な転送方法と ETL 機能に対して **[有効にする]** をクリックし、**[OK]** をクリックします。
 - ログデータを OSS に転送する方法については、「」、「[Ship logs to OSS](#)」、「」をご参照ください。
 - ETL 機能の設定方法のメソッドについては、「」をご参照ください。
5. ログを分析します。
 - a. 次の図に示すように、OSS コンソールで **[ログ分析]** のアイコンにマウスカーソルを移動させ、**[Log Serviceの管理]** をクリックします。
 - b. ログ分析 ページで、**[ログを分析する]** をクリックします。
 - c. ログ分析ページが表示されます。ログ分析結果は、データベースまたはダッシュボードで確認できます。

4 リソースの使用量の確認

概要

OSS コンソールで、次のリソースの使用状況を確認できます。

- 基本データ: バケット、使用データ、1時間あたりのリクエスト数
- ホットスポット統計: PV/UV、オリジナル、ホットスポット
- API 統計: メソッドの統計とリターンコード
- オブジェクトアクセス統計: オブジェクトアクセスに関する統計

このドキュメントでは、基本データを例として、リソースの確認方法を説明します。

手順

1. [OSS コンソール](#)にログインします。
2. 左側のバケットリストで、対象のバケット名をクリックして情報ページを開きます。

3. **[基本データ]**タブをクリックすると、次の図に示すように、次の3種類の基本データの図が表示されます。

Home Products

Object Storag...
Overview
Bucket + ⬆ ⬇

celcom-big...
cjltest-intl
document-...
document-...
ecsdoc-text
example-co...
mytestbuck...
originbucket
ossvolume
redirectbuc...

1/2

mytestbucket1234

Overview | Files | Basic Settings | Domain Names

Today | Yesterday | 7 Days | Start Date - End Date

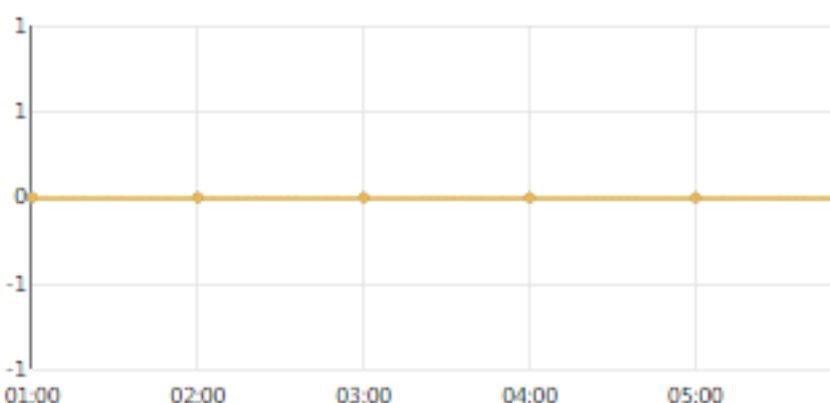
Bucket



0
0
0
0
0

01:00 02:00 03:00 04:00 05:00

Data Used



1
1
0
-1
-1

01:00 02:00 03:00 04:00 05:00

● CDN Inbound (MB)

Requests per Hour



15
10
5

- バケット
- 使用データ
- 1時間あたりのリクエスト

次の3つの表は、3つの図に含まれる基本データ項目とその項目の説明です。

表 4-1: バケット

基本データ	説明
スタンダード	スタンダードタイプに保存されているデータのサイズ
アーカイブ	アーカイブタイプに保存されているデータのサイズ
頻度の低いアクセス	頻度の低いアクセスタイプに保存されているデータのサイズ
合計	データの合計サイズ

表 4-2: 使用データ

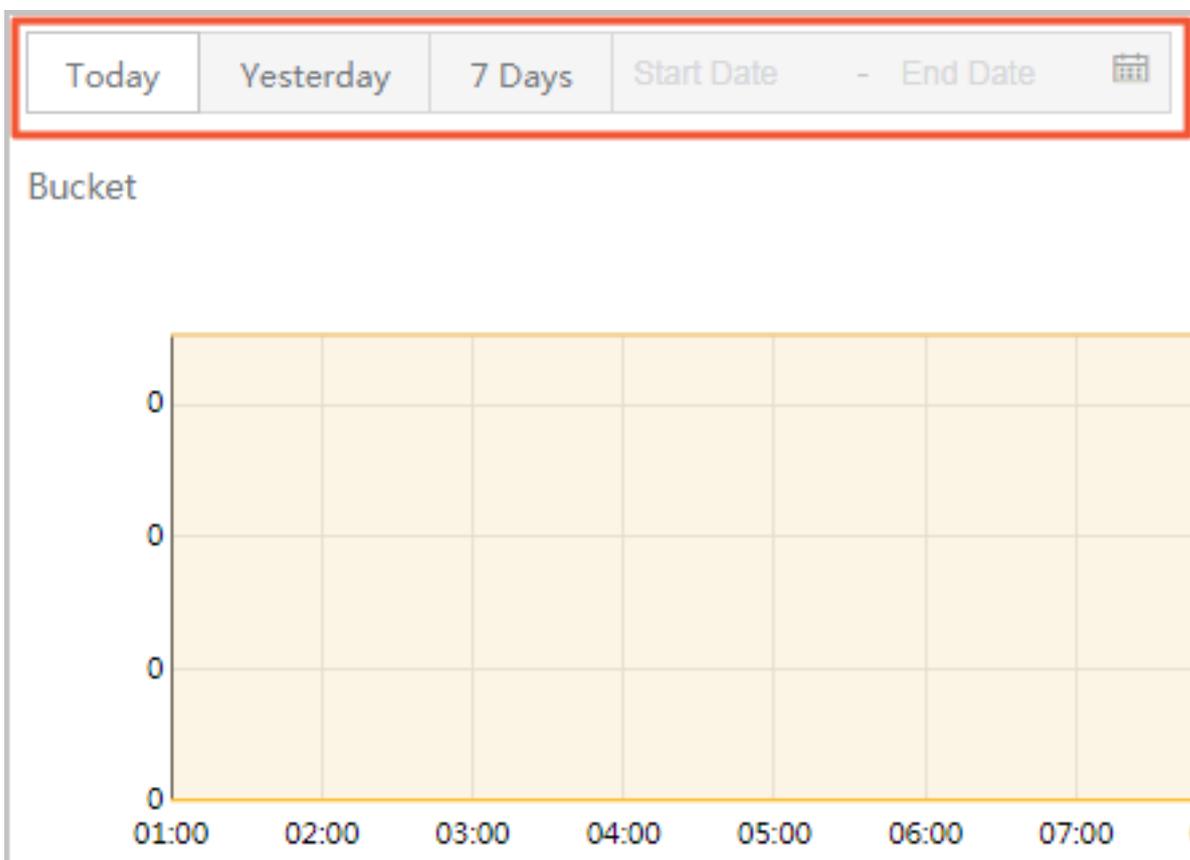
基本データ	説明
CDN へのインバウンド	CDN サービスレイヤーを介してローカルから OSS にアップロードされたデータ
CDN アウトバンド	CDN サービスレイヤーを介して OSS からダウンロードされたデータ
インターネットインバウンド	インターネットを介してローカルから OSS にアップロードされたデータ
インターネットアウトバンド	インターネットを介して OSS からローカルにダウンロードされたデータ
イントラネットインバウンド	Alibaba イントラネットを介して ECS サーバーから OSS にアップロードされたデータ
イントラネットアウトバンド	Alibaba イントラネットを介して OSS から ECS サーバーにダウンロードされたデータ
リージョン間レプリケーションインバウンド	リージョン間レプリケーション受信データは、リージョン間レプリケーション機能を使用し、対象のバケットからソースバケットに同期的に複製されます。

リージョン間レプリケーションアウトバウンド	リージョン間レプリケーション受信データは、リージョン間レプリケーション機能を使用し、ソースバケットから対象のバケットに同期的に複製されます。
-----------------------	--

表 4-3 : 1 時間あたりのリクエスト

基本データ	説明
Get-タイプリクエスト	1 時間あたりの GET リクエストの数
Put-タイプリクエスト	1 時間あたりの PUT リクエストの数

4. 次の図に示すように、リソース使用状況の図の単位時間を選択します。

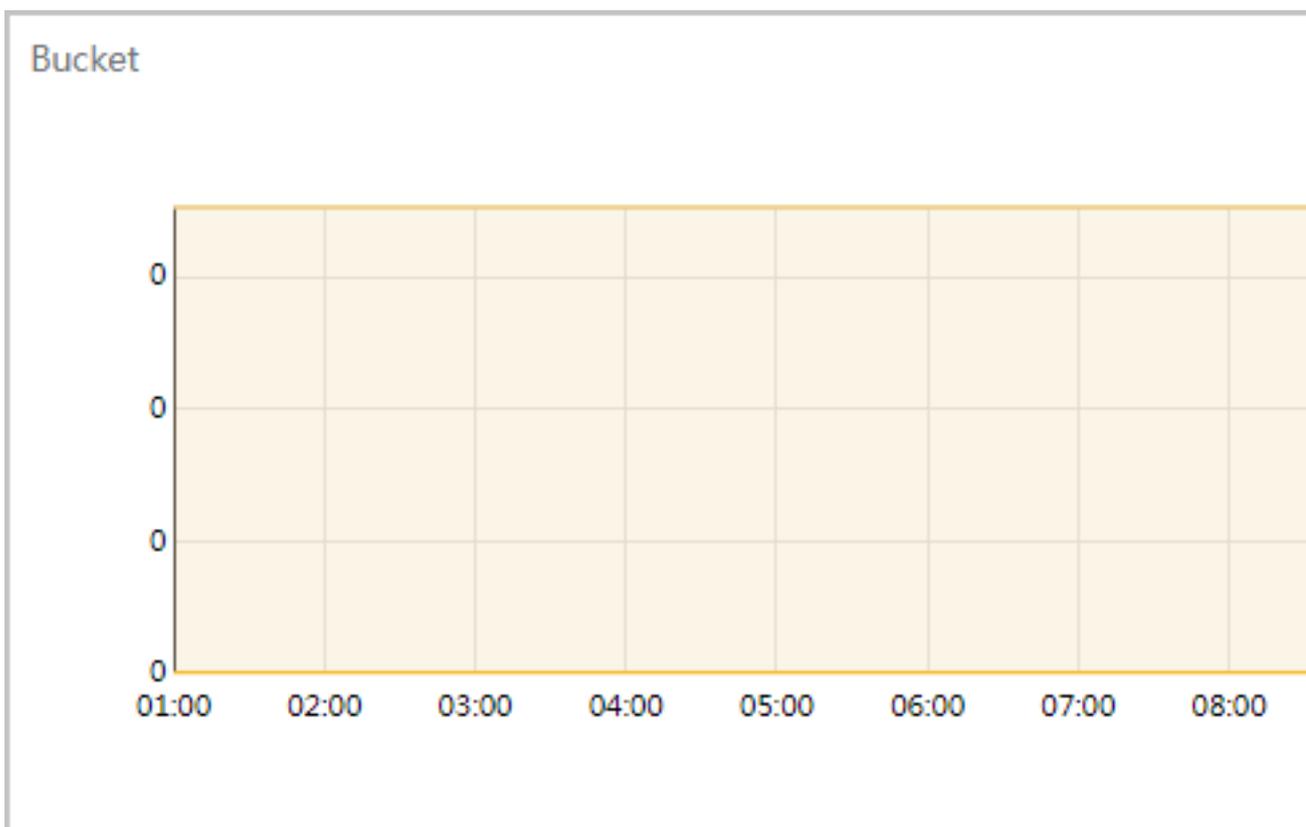


- 今日: 当日のデータのみが図に示されます。
- 昨日: 昨日のデータのみが図に示されます。
- 7 日: 直近の 7 日間のデータのみが図に示されます。
- カスタマイズされた期間: 期間の開始日と終了日を選択できます。この期間のデータが図に示されます。

5. 対応する図で必要な基本データを確認します。バケットの図を例として、基本データの確認方法を説明します。

- 基本データ項目の表示ステータスは、図の右下に表示されます。基本データ項目の前の丸印が塗りつぶされていない場合、その基本データ項目は図に表示されません。基本データ項目の前の丸印が塗りつぶされている場合、その基本データ項目は図に表示されています。

たとえば、次の図では、**【基本データ】**項目と**【アーカイブデータ】**項目は図に示されておらず、**【アクセス頻度の低い】**データ項目と**【合計データ】**項目が図に示されています。



注：

既定では、すべてのデータ項目が図に表示されます。

- 基本データ項目の前にある丸印をクリックすると、次のステータスに切り替えることができます。1. 基本データ項目を図に表示します。2. 基本データ項目を図に表示しません。
- 基本データ項目の前にある丸印をダブルクリックすると、次の2つのステータスの間で切り替えることができます。1. この基本データ項目のみを図に表示します。2. すべての基本データ項目を図に表示します。